The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メタフュシカ 第40号 彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2009, 40, p. 131-133
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9082
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【彙報】

○　哲学哲学史・現代思想文化学

現在、学部の哲学・思想文化学専修には、2 年生 6 名、3 年生 5 名、4 年生 7 名が在籍しています。大学院の哲学哲学史専門分野には、博士前期課程 6 名、後期課程 4 名が、大学院の現代思想文化学専門分野には、博士前期課程 7 名、後期課程 4 名が在籍しています。他に学術振興会研究員が 1 名在籍しています。上野修教授、入江幸男教授、舟場保之准教授、および須藤訓任教授、望月太郎教授、中村征樹准教授、重田謙助教の各教員が、臨床哲学所属の教員と連携しつつ、学生の教育・研究指導にあたっています。

本年度の講義・演習は、「ライプニッツとスピノザ――現実性をめぐって」「言語・主体・真理――ラカン、デイヴィドソン」「スピノザ『エチカ』を読むⅤ, Ⅵ」（上野教授）、「観念論を徹底するとどうなるか？」「Discussion on J. R. Searle's "The Costruction of Social Reality" in English」「Discussion on R. Brandom's "Articulating Reasons" in English」「様相論理学入門（1),(2)」（入江教授）、「カント実践哲学の諸問題」「J. ハーバーマスの思想Ⅲ」「カント『純粋理性批判』を読むⅩ, Ⅺ」「ドイツ哲学基本文献購読Ⅰ,Ⅱ」（舟場准教授）、「現代哲学史概説」「フロイトの症例「狼男」(1),(2)」「ニーチェの歴史思想（4),(5)」（須藤教授）、「オルターグローバリゼーションの思想」「Philosophical Conception of Critical Reasoning」「現代思想文化学基本文献読解」（望月教授）、「技術論と技術の哲学（2)」「先端科学技術と社会」「フランス知識人の時局への発言を読む」（中村准教授）という題目で行なわれています。また、その他に、修士論文・博士論文作成のための演習が定期的に行なわれ、活発な研究・討論が行なわれています。

また非常勤講師としては、山口義久先生（大阪府立大学）に「西洋古代哲学の科学的発想」、飯田隆先生（慶應義塾大学）に「日本語の論理と意味」という題目で講義していただいています。

哲学を音声で伝える試みとして、ウェブ・ラジオ局「ラジオ・メタフュシカ」（http://radio.metaphusika.net）を開局し、研究室の活動状況などを公開しています。また海外に研究成果を発信するために、欧文機関紙 Philosophia OSAKA を刊行しています。この雑誌は本誌『メタフュシカ』とあわせて、研究室の HP（http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy）の「出版物」のページから閲覧することができます。

哲学哲学史・現代思想文化学の研究会として、handai metaphysica を開催しています。特別講演会としては、2009 年 5 月 26 日にはカニット・シリチャン教授（チュラロンコン大学）に "Reasoning and Its Limits" という題目で、同 7 月 7 日にはスパクワディ・アマタヤクン教授（チュラロンコン大学）に "J. S. Mill's Radical Feminism in The Subjection of Women" という題目で、またピーター・ハーテロー教授（エラスムス大学）に "Philosophical Practice: Theory of Practice of an Emerging Paradigm" という題目で、2009 年 12 月 5 日にはマルチン・エルベル氏（オルモウツ大学）に "Religion, History, and Culture in the Czech Rep." という題目で、マルチン・ガレント氏（ヤゲロニア大学）に "From the Continent of Outflow to the Continent of Inflow" という題目で講演していただきました。

また、研究例会としては、同3月23日に舟場准教授、安里院生の各論文（『メタフュシカ』第39号掲載）の合評会を行い、また同7月31日には山口義久教授（大阪府立大学）に「いわゆる『ソクラテス問題』とプラトン」という題目で、同12月11日には飯田隆教授（慶應義塾大学）に「言語が変化するということはどうして可能なのだろうか」という題目で講演していただきました。いずれにおいても活発な質疑応答がなされました。

望月教授が、チュラロンコン大学文学部哲学科（2008年8月15日、バンコク）において“Applying the Art of Questioning to Critical Thinking Education”という題目でセミナー講演を行いました。

須藤教授が共著者となっている岩波講座『哲学9 科学／技術の哲学』（岩波書店）が、2008年9月に刊行されました。

独日倫理コロキウム Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium（2008年9月9日、於早稲田大学ヨーロッパセンター、ボン）において舟場准教授が „Der Gemeinspruch von der Philosophie zurückgewiesen werden.“ という題目で研究発表を行いました。

関西工学教育協会機械分科会主催の平成20年度第1回研究会（2008年9月10日）において中村准教授が「技術者倫理教育の動向～「倫理」から「責任ある行動」へ」という題目で講演を行いました。

舟場准教授が編著者となっている『グローバル・エシックスを考える――「9・11」後の世界と倫理』（梓出版社）が2008年10月に刊行されました。

アサンプション大学哲学・宗教大学院（2008年12月17日、バンコク）において望月教授が、“Dialectic between the private and the public: Philosophy of Descartes’ *Discourse on the Method*”という題目で講演を行いました。

スピノザ協会第50回研究会（大阪大学文学研究科共同研究「近現代哲学の影響作用史的共同研究――トラウマとしてのスピノザ」共催）（2009年1月24日、大阪大学総合学術博物館待兼山修学館セミナー室）において須藤教授が「必然性の憑依――スピノザ、ショーペンハウアー、ニーチェ」という題目で講演を行いました。

公開シンポジウム「〈私〉とは何か――永井均に聞く」（2009年3月7日、科学研究費補助金基盤研究（C）、〈私〉の言語論的存立構造 の哲学的研究、大阪大学豊中キャンパス21世紀懐徳堂センター）において上野教授がパネリストの一人として講演を行いました。

大阪府立大学総合教育研究機構プロジェクト「教員の連携に基づく「教養教育」の新たなモデルの試み」研究グループ主催の「近代を問う」第2回研究会（2009年3月18日）において中村准教授が、「工業化する都市と技術者――19世紀フランス工芸院の公開講座」「サイエンスカフェの挑戦」という題目で講演を行いました。

須藤教授が共訳・解題者となっている『フロイト全集第12巻 1912-1913年トーテムとタブー』（岩波書店）が2009年6月に刊行されました。

日本ヘーゲル学会第9回研究大会のシンポジウム「ドイツ古典哲学と（ポスト）分析哲学――対立から融合へ――」（2009年6月13日、東北大学）において入江教授が「内在的基礎付け主義とドイツ観念論」という題目で講演を行いました。

The Third EASTS International Journal Conference（2009 年 6 月 19-20 日）において中村准教授が “STS in Japan in the light of the Science Cafe Movement” という題目で講演を行いました。

平光哲朗氏（岐阜聖徳学園大学短期大学講師）が「持続としてのイマージュ――ベルクソン哲学における持続の現実的多様性について――」という題目で、前田直哉氏（近畿大学講師）が「フッサール最晩年の思想――世界発生的問題と現象学の自己批判――」という題目で、それぞれ 2009 年 3 月に博士号を取得しました。

生島弘子院生が 2009 年 3 月に留学先のドイツ・ミュンヘン大学から帰国しました。

（重田）

○　臨床哲学

本年度の当研究室の在籍者は、学部生が 28 名、大学院生が 22 名（前期課程 13 名、後期課程 9 名）である。中岡成文教授、浜渦辰二教授、本間直樹准教授（兼任）、家高洋助教の各教員スタッフが、哲学哲学史・現代思想文化学の教員と連携しつつ、教育・研究活動に当たっている。

本年度は非常勤講師として、小林傳司教授（大阪大学コミュニケーションデザイン･センター）に科学技術論、霜田求准教授（大阪大学大学院医学系研究科）に生命倫理〔英語によるディスカッション〕、紀平知樹講師（兵庫医療大学）に環境倫理の集中講義を担当していただいた。

本年（2009 年）7 月に鷲田総長の『噛みきれない想い』（角川学芸出版）が出版された。岩波書店の『岩波講座　哲学』では、第 1 巻「いま〈哲学する〉ことへ」のなかで中岡教授が「経験批判としての臨床哲学」、第 6 巻「モラル／行為の哲学」のなかで本間准教授が「コミュニケーション・トラブル」、第 15 巻「変貌する哲学」のなかで鷲田総長が「哲学のプラクティス」を執筆している。また、『〈かたり〉と〈作り〉――臨床哲学の諸相』（木村敏・坂部恵編、河合文化教育研究所）のなかで浜渦教授が「ナラティヴとパースペクティヴ」を寄稿した。なお、来年（2010 年）2 月に、本間准教授責任編集の『フロイト全集第 16 巻』（岩波書店）が刊行予定である。

本年度の講義・演習は以下の通りである。

「臨床哲学ネットワーキング 09 前・後」（中岡、浜渦、本間、家高）、「臨床哲学研究」（中岡、浜渦、本間）、「倫理学の研究方法」（中岡、浜渦、家高）、「自己変容の哲学 5・6」、「ヘーゲルを読みぬく」（以上、中岡）、「フッサール他者論のゆくえ」、「外国語文献演習」、「ケアの人間学―人間の病いとそのケア―」、「病いとケアを考える」（以上、浜渦）、「イメージ論を読む（1）・（2）」、「思考の活動とメディア（2）思考のイメージ」、「思考の活動とメディア（3）思考のアクティヴィティ」、「哲学的コミュニケーションの探求と実践（5）・（6）」（以上、本間）、「レヴィナスを読む（1）・（2）」（家高）、「科学技術と公共性」（小林）、「Bioethics in English」（霜田）、「共有地としての環境」（紀平）。

（家高）